

OSCE導入による教育効果

- 学生は、その学年に求められている技術や態度がどのように評価されたのかがわかる
 - 自己評価とのギャップを知ることができる
- 自分の学修課題が明確になり、自己学修習慣が確立
- 臨地実習、卒業生への高い評価

OSCE導入によって 獲得したこと

- 卒業までに一定レベルの看護実践能力の修得を保証する学修環境の整備
- 今後は卒業生にも「学社連携による循環型就業力育成支援事業」としてさらに充実させていく予定

OSCE 導入による教育効果は、その学年に求められている技術や態度が評価が明確になり、自己の良い点とできなかった点をはっきりするところです。特にできなかったところはどこなのか、どうしたらできるようになるのかがはっきりすることで、学修の動機付けにつながるということがわかりました。また、実習に行った学生は、OSCE で、模擬患者さんや教員に指摘されたことを思い出しながら、気をつけて実習していますと学生自ら言うほど、学生にとっては非常にインパクトのある体験であり、自己学習に非常に役立っているということがわかりました。

OSCE を4年間やってきて感じているのは、学習環境を整えることです。試験という形をとっておりますけれども、やはり、それまでの学習、日々の教育が基本です。学生が、自主的に勉強する習慣づくりです。自主的に勉強しなさいと言ってもきっかけや環境が自主学習に見合っていないとできません。本学では、実習室は、大学が開いている間は、自由に学生が使える状況にしています。それから、実技指導のためのインストラクターを何人か雇用しています。学生がいつ実習室に行っても、対応できるよう、シフトを組んでもらい、フィジコなどの高額なシミュレーターを整備し、使い方を指導し、学生が自由に使えるようになっています。そういった日々の教育環境が整備されていないと、OSCE だけやっても、継続した学習効果は得られないと思っております。

今後、OSCE で培ってきた技術教育は就業力育成支援事業として、今後卒業生にも適用させていく予定です。

OSCE導入による教育効果

- OSCE導入を視野に入れたカリキュラム構築やFD
 - 全領域の教員が準備、実施、評価プロセスを共有し、教員の専門外の実践・評価能力のスキルアップ
- 教員間のコミュニケーション
- 教員の教育力の向上

そういった自己学習習慣を確立させていきたいということも、本学の非常に大きな教育目標ですので、そういったところを、さらに今後も卒業生も、声をかけていきたいと思っております。

OSCE は学生の教育だけじゃなくて、実は、教員の教育力の向上にも寄与しています。例えば、OSCE を行うに当たってほとんどの教員はOSCEの経験はなく、OSCE そのものについても知らない教員も多くおりました。従って、最初は、学習会形式のFDが多々行われました。シラバスの作成にもOSCEを視野にいれながら作っていきました。他領域との風通しがよくなり、他の科目で何をやっているのかということも、よくわかるようになりました。それから、専門外の技術項目について評価することで、教員の看護実践能力もアップしたようです。

札幌市立大学看護学部の OSCE の実際 Part2 (松浦和代先生)

平成20-22年度大学改革推進等補助金
質の高い大学教育推進プログラム
「学年別OSCEの到達度評価と教育法の検討」

**看護OSCE
学年別難易度に関する検討**

札幌市立大学看護学部
松浦和代

本日の構成

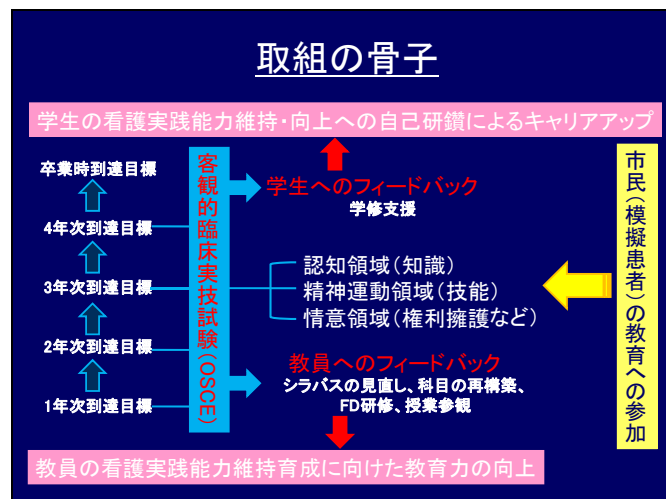
- 札幌市立大学看護OSCE
 - ・取組の全体像
 - ・学年別検証部門の役割
- 到達度検証
 - ・OSCE課題の学年別難易度評価
- SCU OSCE MAP

本日は、札幌市立大学における看護 OSCE の取り組みの全体像と実施体制、そして学年別検証部門の機能について紹介させていただきます

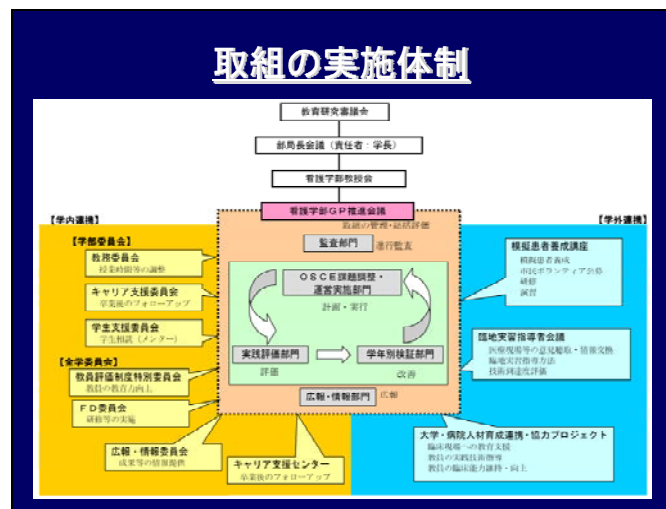
札幌市立大学看護OSCE

- ・取組の全体像
- ・学年別検証部門の役割

この取り組みの骨子は、「育てるOSCE」という点にあります。医学部、歯学部、薬学部が現在実施している臨床実習前の共用試験、すなわち「実習に出ることが可能か否か」を評価するための試験ではありません。着眼点が異なります。



本学の教育理念が「育てる OSCE」の根幹にあります。Ppt4 の左側に 1 年次から 4 年次の到達目標、卒業時の到達目標が 5 段階で示されています。OSCE を各学年度末に実施し、1 年間の学修の集大成としてほしいと考えています。市民(模擬患者)参加によって、フィードバックを充実させることができました。模擬患者さんの声で、学生は、情意領域の学びを得るといふ仕組みとなっています。単なる実技試験とは異なる特長がここにあります。

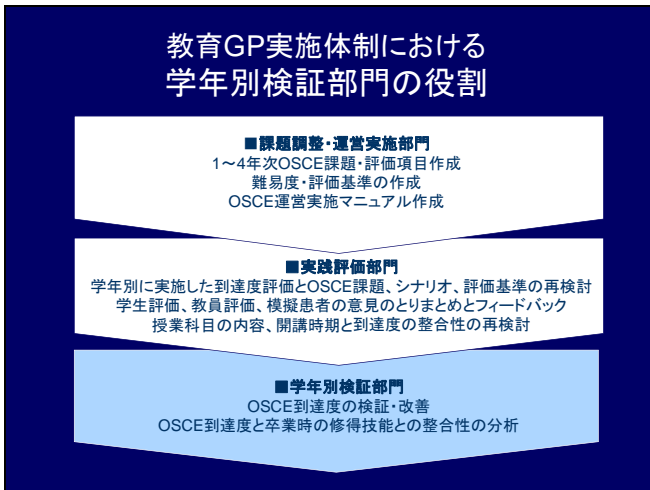


Ppt5・6 に実施体制をお示しします。この取り組みの中核は看護学部 GP 推進会議で、各部門長で構成しています。月 1 回の定例会議を開催し、取り組みの全体的な管理、運営、予算執行などについて協議します。

OSCE 課題調整運営実施部門は 2 班に分かれています。課題調整班は課題作成を計画的に進めます。具体的には、各領域から起案されたものを討議し合い、課題案として、教育 GP 推進会議に付議します。また、運営実施班は OSCE の実施準備及び当日の運営を担当します。実践評価部門は、成績を集計し、個々の学生へ即日フィードバックします。

その後、成績全般について学年別検証部門が分析に入ります。この他、広報情報部門が広報資料や、先ほど視聴していただいた DVD、年度末の報告会企画、ホームページなどの作成を担当しています。模擬患者養成コース、臨床実習指導者会議、大学病院人材育成連携協力プロジェクト部門が動きます。

改善点を提案します。8月下旬になりますと、学年別検証部門の報告を受け、課題調整班が活動を開始します。





到達度検証 —OSCE課題の学年別難易度評価—

OSCE課題の評価における 学年別検証部門の役割

- 形成評価における役割
実施評価部門の評価結果を受けて、学年別の到達度を評価する。
- 総括評価における役割
4年次生の卒業時到達度の評価を行なう。

1. OSCE成績データの収集および整理の状況

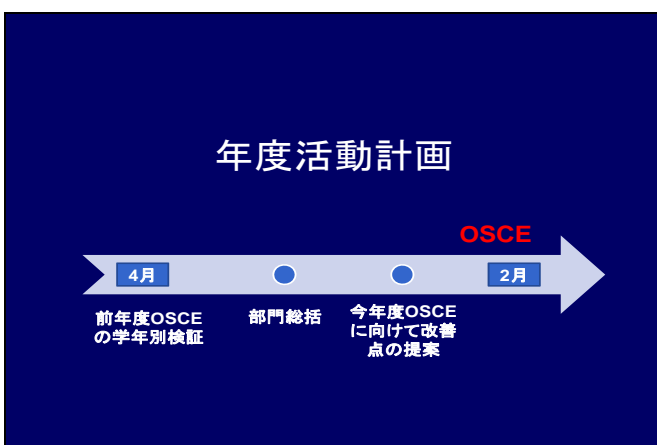
○印：データが収集されていることを示す

	学内共同研究費・科研費		教育GP	
	H18	H19	H20	H21・22
1年次	○	○	○	○
2年次		○	○	○
3年次			○	○
4年次				○
データ整理	Mulberry 追加入力	Mulberryシステム使用		

Ppt7 に、学年別検証部門の形成評価における役割と総括評価における役割を要約します。今年度2期生を輩出しますが、看護実践能力の卒業時到達度については中・長期的な視点で評価が必要と考えています。

学年別検証部門は、教育 GP 初年度（20年度）に、データベースの様式を作成しました。また、本学デザイン学部教員の協力により、OSCE 管理運営システムを充実させました。1つは、OSCE を運営する時間管理用のタイマー。もう1つは、OSCE 成績を即時データベース化し、学生へのフィードバック用に個人成績をレーダーチャート化するシステムで、これをマルベリーオゾンと呼んでいます。

私たちは、現在までに OSCE 試行期間の 18～19 年度と、本取組を開始した 20 年度以降の全成績を保有しています。



Ppt8 は、学年別検証部門の基本的な活動スケジュールです。毎年2月に OSCE を行いますので、他の部門はその実施に向けて前年の夏から活動を開始します。しかし、私たち学年別検証部門は、OSCE 成績が揃う4月から OSCE 検証を始め、部門総括集を編纂し、次年度 OSCE に向けての

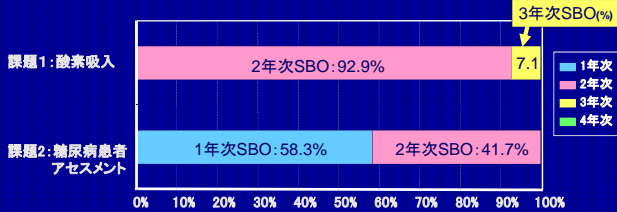
検証③

分析例

総得点に占める学年別SBOの割合

- 課題ごとに、評価項目と各学年SBOとの対応をチェック
- 各課題の総得点に占める学年別SBOの割合を検証

平成20年度 2年次課題：総得点に占める学年別SBOの割合



検証④から示唆されたこと

- ◆ SCU OSCE MAP の作成
- ◆ SCU OSCE MAP の活用

これは、学生に対してある意味、教育詐欺を働いていることになると思います、慌てました。そこで、9領域以外の専門科目についても、看護実践能力の大項目・細項目との対応状況を点検してみました。

その作業を通して、私たちは、OSCEの出題範囲を可視化する必要性を痛感しました。OSCEの質を保証していくためには、全専門科目を網羅した一覧表を作成しなければならない、との結論に至りました。

2年次課題のSBOと、前述の2課題の評価項目との対応を全てチェックしてみました。さらに、2年次SBOだけではなく、1年次や3年次との対応についてもチェックしました。すると、課題1の酸素吸入は、大半が2年次のSBOに対応していましたが、7%は3年次SBOに対応していたことを発見しました。逆に、課題2は1年次SBOに6割対応しており、2年次SBOへの対応はわずか4割であったことを発見しました。



SCU OSCE MAP

検証④

看護実践能力の大項目・細項目との対応

	基礎		成人		老年	
	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次
I ヒューマンケアの基本に關する実技能力						
1) 人の尊厳の重視と人権の擁護を基本に据えた援助行動	(1) 個別的な価値観・信条や生活背景を持つ人の理解	0	0	Δ	0	0
	(2) 人の尊厳及び人権の意味を理解し擁護する行動	0	0	Δ	0	0
	(3) 個人情報の持つ意味の理解、情報の適切な取り扱い	0	0	Δ	0	0
2) 利用者の意思決定を支える援助	(1) 利用者の意思決定に必要な情報の提供	0	0	Δ	0	0
	(2) 利用者の思い・考え・意思決定の共有、意思表明への援助、意思決定後の支援	0	0	Δ	0	0
	(3) 利用者の意思の関係をへの伝達、代弁者役割の遂行	0	0	Δ	0	0
3) 多様な年代や立場の人との援助的関係の形成	(1) 利用者の思い、考え等意思の適切な把握	0	0	Δ	0	0
	(2) ケアに必要な他者との人間関係の形成	0	0	Δ	0	0
II 看護の計画的な展開能力						
4) 看護の計画立案・実施・評価の展開	(1) 看護過程を展開するために必要な情報の収集・分析と健康問題の判断	0	0	Δ	0	0
	(2) 看護上の問題の明確化と解決のための方策の提示	0	0	Δ	0	0
	(3) ①問題解決のための方法の選択、利用者へのインフォームドコンセント ②直接的看護方法：相談・教育の実施	0	0	Δ	0	0
	(4) 実施した看護の事実に即した記録作成	0	0	Δ	0	0
	(5) 実践と学習の記録、評価の振り返り	0	0	Δ	0	0

1. SCU OSCE MAPとは

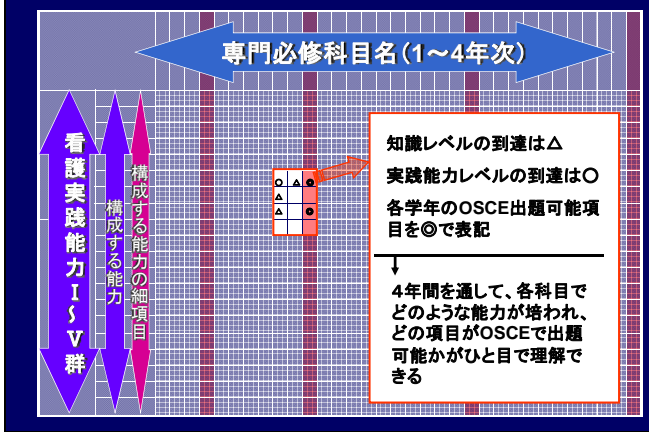
札幌市立大学看護学部が取り組んでいる学年別OSCEの出題可能項目に関する体系表



看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標(文部科学省, 2004)に対応させ、本学部で履修する専門必修科目の到達度を「知識レベルでの到達」「実践能力レベルの到達」の2段階で表記。

次に、検証④。本学カリキュラムが掲示されています。専門科目の中に、基礎、成人、老年、小児、母性、精神、在宅、地域、管理の9領域があります。各領域は、概論、援助論、技術論、実習で構成されています。開学当初に、私たちは、これら9領域と、看護実践能力の大項目・細項目との対応表を作成していました。平成19年度、この対応表上に、OSCEの出題内容をプロットしてみました。すると、知識レベルで到達すればよいとしているにもかかわらず、OSCEに出題されている項目が随分あることを発見しました。

2. SCU OSCE MAPの構成要素



SCU OSCE MAP (3年次) 必要部分のみ簡略表示	OSCE課題担当領域			
	成人	老年	小児	精神在宅
看護実践能力の大項目・細項目				
1) 人の健康・人権の尊重を基本に				
2) 個人の健康・人権の尊重を基本に				
3) 個人の健康・人権の尊重を基本に				
4) 看護の計画立案・実施・評価の展開				
5) 人の成長発達段階・健康レベルの看護アセスメント				
6) 看護の計画立案・実施・評価の展開				
7) 看護の計画立案・実施・評価の展開				
8) 看護の計画立案・実施・評価の展開				
9) 看護の計画立案・実施・評価の展開				
10) 看護の計画立案・実施・評価の展開				
11) 看護の計画立案・実施・評価の展開				
12) 看護の計画立案・実施・評価の展開				
13) 看護の計画立案・実施・評価の展開				
14) 看護の計画立案・実施・評価の展開				
15) 看護の計画立案・実施・評価の展開				

3年次OSCE
⇒学生は割り当てられた群で2課題に取り組み

出題された項目をMAP上にマーク

最も適切な課題の組み合わせを検討

出題項目に●

SCU OSCE MAP (原寸 A3版)

拡大

3. SCU OSCE MAP の利点

- OSCEの学年別難易度に関する理解を容易にする。
- 自・他領域の講義・演習・実習の到達度が把握でき、それを参照しながらOSCEに出題可能な範囲を特定できるので、学年度末の総合評価に適したOSCE課題の作成が可能となる。
- OSCE課題の妥当性について事前評価ができる。

そこで作成したのが、ppt20・21のSCU OSCE MAPです。現在の使い方ですが、MAP上に、全専門科目の知識レベルの到達を△で、実践能力レベルでの到達を○で記入します。そして、履修した専門科目を総合し、各学年の年度末のOSCEに出題可能な項目を○で記入します。

SCU OSCE MAP (2年次) SAMPLE	看護科目	2年前期		2年後期		成人看護学臨床実習1	成人看護学臨床実習2
		成人看護学概論	成人看護学実践論	成人看護学概論	成人看護学実践論		
看護実践能力の大項目・細項目							
II 看護の計画的な展開能力							
4) 看護の計画的な展開・実施・評価の展開	(1) 看護過程を展開するために必要な情報の収集・分析と鑑別問題の判断	○	○	○	○	○	○
	(2) 看護上の問題の明確化と解決のための方策の提示	○	○	○	○	○	○
	(3) ① 問題解決のための方法の選択、利用者へのインフォームドコンセント	○	△	○	○	△	○
	② 直接的看護方法・相談・教育の実施	○	△	△	△	△	○
	(4) 実施した看護の事実と期した記録作成		△	○	○	△	○
5) 人の成長発達段階・健康レベルの看護アセスメント	(1) 身体的変化の把握と判断	○	△	△	△	○	○
	(2) 認識・感情の働きと心理的変化の把握と判断	○	△	△	△	△	○
	(3) 成長発達段階に応じた健康問題の把握と判断	△	△	△	△	○	○

次に、課題作成者は、実際にOSCEに出題した項目を●でプロットします。Ppt23をご参照ください。その後、学年別検証部門が第三者評価を行い、結果を課題作成者にフィードバックします。この検証サイクルが定着したことによって、OSCEの質が保証できるようになりました。

MAPの利点をいくつか説明させていただきます。まず、難易度に関する理解が容易になりました。MAP作成以前は、1年生の課題が2年生の課題と難しさが変わらない感じがする、2年生の課題が2年生らしくない、あるいは3年生っぽい、等の悩みがあってもその理由を整理と分析できませんでした。しかし、検証③と、MAP作成による検証④の強化によって、教員が共通の物差しを用いてOSCEの難易度を考察できるようになりました。2点目に、自他領域の講義、演習、実習の到達度がMAPで確認でき、出題範囲の適正化が図られるようになりました。3点目に、MAP活用によって、課題作成者がOSCE課題の妥当性を事前評価できるようになりましたので、後で「変な問題だった」というような指摘を受けることがなくなりまして、気持ちよく仕事ができるようになったという点も、大きな利点だと思います。

4. 平成22年度までのMAP 活用状況

- 各年度のOSCE課題をMAP上に一覧化
- OSCE課題の出題可能範囲が可視化



- OSCE課題の不適切箇所を事前修正
- 3年次OSCEの課題組み合わせを検討
- 年度総括～次年度改善点の明確化
- 本学カリキュラムの評価～教育力のアップへ

最後に、MAPの活用状況について。まず、OSCE課題の不適切箇所の事前修正に活用しています。それから、6看護領域のOSCEが集中する3年次では、現在、2課題3コースで実施していますので、コースの較差を最小限にするために、課題の組み合わせの協議にMAPを用いています。さらに、年度総括においても、次年度の改善点についてMAPを参照しながら解説しています。

MAPの活用は、カリキュラムの評価にもつながります。コア科目だけでは展開が不十分な部分を、関連科目がどのようにカバーしているかといった点検もできますので、教員の他科目に対する意識が高くなってきました。教育力が確実にアップしてきたと、私たちは考えています。

私が準備させていただいた内容は以上です。今年度での教育GPは終了しますが、「育てるOSCE」は札幌市立大学の特色ある教育内容として定着していくと思います。